

青少年ふくしま

福島県青少年育成県民会議
第52号
平成28年8月25日(木)

残暑お見舞い申し上げます。

リオオリンピック終了とともに「暑い夏」もしのぎやすい初秋に移行しつつあります。

オリンピックでは、日本選手の活躍で若者の今後の健全育成にも好影響を与えるものと確信しています。会議員の皆様には、本県民会議の各事業に対しまして、日頃より多大な御支援や御協力を賜り、心から感謝と御礼を申し上げます。

さて、今年度重点推進事項「大人が変われば、子どもも変わる県民運動」の推進の一環として「大人が変わるためのセミナー」を実施しています。前回の「青少年ふくしま」第51号では第1回セミナーの概略をお伝えしました。引き続き、本号では第2回セミナー（福島県青少年会館で開催）の内容をお知らせいたします。（紙面の都合上、概略的な記録ですので、ご了承ください。）

平成28年度 第2回「大人が変わるためのセミナー ～思春期から青年期の親の心構え」

□ パネルディスカッションの記録

◇ 日時：平成28年7月23日(土) 13:00~14:45 ◇ 会場：福島県青少年会館 大研修室

◎ テーマ「地域で子どもたちをどう育てるか」

- | | | |
|------------|---------------|---------|
| ○ コーディネーター | ・ 福島大学名誉教授 | 境野 健児 氏 |
| ○ パネリスト | ・ 大玉村教育委員会教育長 | 佐藤 吉郎 氏 |
| | ・ 保護者代表 | 安斎 文彦 氏 |

元二本松市立油井小学校PTA会長 元福島県立安達高等学校PTA会長
昭和タクシー株式会社代表取締役社長

～ パネルディスカッションの主な内容 ～

○ 境野氏（コーディネーター）

- ・ 今は子どもたちの生きる力を育てる時代。3つのバロメーターが失われてきている。
[空間]…狭まってきている。 [仲間]…少なくなってきている。 [時間]…奪われてきている。
- ・ 子どもが育つには文化が必要。子どもたちの育つ文化を地域で学校で、家庭で提供を。

○ 安斎氏（パネリスト）

- ・ 毎日を明るく楽しく感謝して過ごした親を10年間見て育った子どもは、そんなに悪くはない。「おはよう、ありがとう、おかげ様で」という言葉を発することによって心が出来上がってくる。それを10年間続けることによって、いい形になっていくのではないか。大人や子どもは、毎日を明るく楽しく過ごすことが大切。人生は今日が始まり。「おはよう、ありがとう、ご苦労様」大人も子どももたった一言で、楽しく、幸せにすることができる、愛を伝えることができる。反面、たった一言で悲しませることも怒らせることもできる。言葉を交わすことは大事なんだということを伝えなければならない。我々は毎日いろいろなものに感謝しながら生きていければと思う。夜空には、星が輝いている。誰にでも見えるが、それを見るか見ないか。子どもたちに星は輝いているぞと言いたい。人と比較して、マイナスだ、劣っていると思っても恥じる必要はない。しかし、去年の自分と今年の自分を比較して劣っていたらそれは反省しなければならない。親も去年の自分と今年の自分を比較する作業をして、検証しなければならない。



○ 佐藤氏（パネリスト）

- ・ 境野先生のお話から、千葉大学の明石先生の3つの間（ま）を思い出した。3つの間が奪われたのは、まさにポケモンが流行して子どもたちの生活が変わったということだった。私は、子どもたちが健やかに育っていくためには、もう一つの間が必要なのかなと思う。それは、手間・暇の間。これは学校教育や家庭、地域でも大切なことだ。大玉村ではこの3つの間を補って、放課後、子ども教室を開いて、子どもたちを大切に育てていく活動をしている。
- ・ 大玉村の教育について説明（※「夢を育てる大玉の教育」大玉村発行リーフレット参照）

おおたまの教育の特色

- ①「縦軸の広がり」… おおたま学園構想を軸にした子どもの発達の連なりを指している。子どもの健やかな育ちを支援するためには、村内幼稚園・小学校・中学校が子どもの育ちや学びを分断することなく、一貫した体制で支援することが大切。本村では全ての教職員が同じ眼差しで、子どもたちの育ちを支援できる体制づくりに努めている。「子どもと子どもがつながる」「子どもと教師がつながる」「教師と教師がつながる」の3つの姿を目指して、活動を積み重ねている。
 - ②「横軸の広がり」… コミュニティ・スクールや学校支援地域本部を中心とした保護者、地域住民への広がりを指している。本村では、全ての幼稚園・小・中学校をコミュニティ・スクールに指定している。全ての校園の学校運営協議会委員が、村コミュニティ・スクール委員を兼務し、同一メンバーによる一体的な運営を行っていることが本村の特色の一つ。また、学校支援地域本部事業は、学校を支える応援団として定着し、村内外の人材が活躍している。
 - ③「学びの還元と循環」… 学校教育と社会教育の融合を目指している。村民一人一人の学習ニーズに応じた各種社会教育事業の充実に努めるとともに、生きがいづくりの学びはもとより、学びの成果を社会に還元し、さらに新たな生きがいを感じるといった好循環を生み出すよう、努めている。そのために、学校教育では、地域ボランティアや学生ボランティアを積極的に受け入れ、子どもとボランティア相互の互恵的な関係づくりをこころがけている。
 - ・ おおたま学園は、境野委員長を中心に25人の委員で年9回会合を持ち、活動。主なものは、おおたま学園の課題を共有して、地域の人たちでどのように解決できるか。毎年2回の教育フォーラムを開いて、子どもたちのよいところを探して伸ばす、大玉村で子どもたちの役立つ文化を創っていくなど様々な活動をしている。
- 境野氏（コーディネーター）
- ・ 大玉のコミュニティ・スクールは、学校を積極的に地域に開いて、地域の人たちの力を借りながら、学校と地域がいっしょになって子どもたちを育てるという取り組みを行っている。これからの時代にとっても大事な地域と学校づくりの方向性に大玉村が取り組んでいる例である。
- 安齋氏（パネリスト）
- ・ 民間としていろいろ活動をして、教育委員会を巻き込んでの例。（学校を通して子どもたちに音楽をお願いした…山形交響楽団の公演。）ぜひ地域の民間にも注目して、教育委員会という組織を使わせていただき、協力をいただいている。
- 境野氏（コーディネーター）
- ・ 地域にはそれぞれいろいろな文化があって、人間を育てていく力がある。例、二本松提灯祭り。若い人（若連）が子どもたちに太鼓を教えている。祭りの中心の若い人たちが子どもたちに文化を伝えている。そういう循環が地域にある。教育行政とは別サイクルであるが、学校や教育委員会がそういう力をどんなふうにお借りして子どもたちを育てて豊かにしていくのか。
- 佐藤氏（パネリスト）
- ・ 大玉は平成26年10月に、「日本で最も美しい村」に加盟。地域の伝統行事を大人の方が子どもたちに教え、学習発表会などに発表。地域とのつながりと伝統行事を地域で支えている。地域の神社で十二神楽の後継者、小学校の子どもたちで希望者がやっていることで地域の活力となっている。教える側、教わる側とのつながりができている。
- 安齋氏（パネリスト）
- ・ 若連は、子どもたちに太鼓を教えるため、自分の地域をよく知っている。地域の人、子どもたちの家族（人数、勤め先、学校など）をよく知っている。まず知ることが大切。
- 境野氏（コーディネーター）
- ・ 地域の伝統的な行事や芸能を支えている人たちは、伝統的な行事や芸能を通じて、働く場所が違って地域とつながっていて、実は、そのつながりが子どもたちの文化を支えている。
- 安齋氏（パネリスト）
- ・ 今年の4月から2か月間、二本松市桜展の開催で、二本松市教育委員会と話し合いを持ち、行政の得意なところ、民間の得意なところ、そして、行政の苦手なところをうまくマッチングしていくと大きな効果が生まれた。行政と民間が手を組むといろんなことができる。
- 境野氏（コーディネーター）
- ・ 子どもたちが育つという意味で地域総ぐるみでという言葉がある。今後、多様な地域の人たちの力、組織の力を使いながら、子どもたちを育てていこう、コミュニティスクールの延長上に、地域があらゆる力を借りてどのようにつながっていくかという課題がある。これからは、地域の教育力をどう高めていくか、子どもたちの子育てと地域をどうつくっていくかである。
- 50代男性
- ・ 明るい朝のあいさつを学校でやっている。あいさつや礼儀、マナーをきちんと指導できれば自然と成績もよくなる。人間教育の上で簡単なことだが、意外と難しいことで軽んじると、案外成果が出ない。また、明日から自信を持って取り組んでいきたい。

○60代男性

- ・ 学社連携をどう進めていくか。学校は校長や教職員が地域の力は非常に大切なんだということをお納得していないと務まらないのではないかと。学社連携の理解が大切なのではないか。その意識があると地域の人材を取り入れたカリキュラムをつくっていかうや進んで地域のスポーツ少年団やスポーツクラブに協力しよう、積極的に支援しようという姿勢も出てくると思う。

二つ目は、地域の特色を生かした子どもの育成、地域の人々を巻き込んだ活動が大切だ。二本松市S地区はスポーツを中心とした地域づくりがうまくいっている。地区の運動会は、約50年続いている。これは組織とか計画、予算が無理なく地域に見合った形で整備・準備されている。夏祭りや各種スポーツ少年団、スポーツ祭等がひじょうに盛んで、これから文化活動にも力を入れることを考えている。これから地域の力をしっかりつけていくのが大切と考える。

熱心な質疑応答や活発な意見の交換がありました



○60代女性

- ・ 放課後子ども教室についてお伺いしたい。子どもにとって必要な自由な空間や時間など大切なものだが、具体的に募集方法やどこでやっているのか、内容・中身、どういう方たちがスタッフになっているか。

○50代男性（小学校長）

- ・ 大玉村の小学校に勤めていた時、地域の人たちに学校に入ってもらって一番変わってきたことは、先生たちをしっかりと理解してもらえた。それまでの先生方の多忙感だったものがやりに変わっていった。今では、地域の方がボランティアで学校に来るのが当たり前になっている。そのことによって、子どもたちの教育の質も高くなって、子どもたちの安全が守られている。そういう地域の人材を学校経営に取り入れながらやっていく校長の力が求められている。

地域の青少年健全育成会議で内容がその年の決算、事業の承認などで終わってしまう。こんなに地域の人がいるのに、子どもたちのことを話し合う時間がない。地域にはすばらしい力がありながら、それらがつながっていない地域がいっぱいある。JCや商工会議所、地域のために貢献しようとしている人たちがたくさんいるので、学校はもっとつながって、そういう力を動かしていくことが、地域で総ぐるみで育てるということが大切であると感じている。

○30代男性

- ・ 今保原で、学び合いやあいさつを子どもの小学校でやっている。PTA役員をやり、先生方と語り合う場で子どもや学校、地域のことが見えたり、とてもメリットがあると思っている。最近、このテーマの思春期から青年期の親の心構えということで異質に思っていることは、例えば、育成会が消滅してしまったりする地域があったり、育成会そのものに勧誘しても「私はいいです」、市の広報紙に関しても「回覧板もいりません」。私たちが一歩踏み出して、子どもたちをよりよく育てたい、地域をよりよくしたいという想いがあるとしても、一方で冷めている親御さんたち、現代の若者がいたりする。子どもたちの遊びや地域の大人のつながりが見えない。冷めた人たちや地域に育ってこない人たちをいかに地域力にもってこえるのか。冷めている人やドライな青年・少年、そういった方たちをどういうふう結びつけるか。

○60代男性

- ・ 今子どもを育てていく上でのイノセント、地域との関わり、市町村、行政との関わりは、三つあるのかなと思う。一つは、文科省が中心となった学校地域支援の流れ、あと一つは、内閣府が行っている青少年健全育成の流れ、あともう一つは、厚生労働省が関わっている社会福祉協議会の流れがある。その中で、考えさせられたことがあった。Y県の社会福祉協議会の課長さんが言っていたことで、人間の一生のスパン中で、学校教育とか子どもをどう育てていくか、地域でどう対応していくか非常に大事な事かなと思った。地区の青少年育成協議会で、講演会は小中学校と共催で、小学校長に授業参観に講演会をセットしてほしいと申し入れ、地域と学校のつながりが深まった。この三つの関わりの中で青少年を育てていくことが大切だ。

○境野氏（コーディネーター）

- ・ 行政のどこにどうつながっていくのか押さえておくのが課題だ。

○70代女性

- ・ 地域が何で壊れているのか、これは少子高齢化が非常に大きく影響している。それを何となく学校でつなぎ合わせているような気がしてならない。もし、地域でリーダーがいて、地域の人子どもたちをどのように結びつけていくのか、見守っているのか。利己的・個人的な人が

多くなっているこの時代に、どんなふうにも子どもたちを育てていけばいいのか。大人が変われば子どもも変わるというけれども、大人を変えるにはどんなふうにしたらいいか、今一番の悩み。誰も地区の役員をやってくれる人がいない。これでは、育成会・子ども会・交通安全母の会もなくなる。婦人会なども消滅しそうになっている。そんな中で、子どもたちを育てていく、支えていくにはどうすればいいのか。

○安齋氏（パネリスト）

- ・ 自分が頼むと断られるという連鎖。今日先生方から聞いたことを誰か違う人に返す。最大限の徳を会話する。自分で貯めるのではなく、誰かに返す。その中でお互いに想いを抱いている人が3人集まれば、団体になる。要するにいいことも悪いことも自分のせいである。他人のせいになると、自分もそうになってしまう。だから自分のもらったことは、誰か違う人に返す。そういう連続の中で手をつないでいくしかないんじゃないか。誰かに要求するだけではおそらく解決していかないのではないかと。

○佐藤氏（パネリスト）

- ・ 学社連携融合について、学校教育と社会教育、生涯学習がいかに連携・融合を図っていくのが課題。まさに先ほどの「学びの還元と循環」ということなのかと思う。これからの教育では、開かれた教育課程が使われているが、学校にいかに必要性を発信していくか、校長や教職員にいかに理解してもらうようにするかが、これからの勝負どころになる。それから、地域づくりについて今やっていることをいかにマンネリ化させないことと当事者意識ということの仕掛けがすごく大事になってくる。今新たな試みとして紹介させていただくと、あいさつ日本一ということをやっている。日本一美しい村にしようと、子どもたちのあいさつから始まり、各学校でいろいろな取り組みをしてもらっている。これは着実に目に見えた形で変わってきている。それに合わせ小さな親切運動もやっている。それから、体験活動を大切に、何かできないかということで大玉フェスタ、幼稚園・小学生・中学生のいろいろな組み合わせで、安達太良登山をすとか、大玉の美しい魅力を使っていく中で、子どもたちや先生方の一体感をつくっていくなど、それに向かって今進んでいる。行政の立場なのでそういうことを発信したり、受信したりすることが大事なのかなと思う。

○境野氏（コーディネーター）

- ・ 二人からとても大事なことが提案されている。
- ・ 最後のまとめとしてこんなことを考えていたらどうかかと考えています。

まとめ

- ・ 二本松の提灯祭りは、若連の人たちがすごい力を持っているし、最近、農業に関係なく入学し、農業高校を通じて自分の人生をつくっていきたいという青年も生まれてきています。
- ・ 今自分たちが住んでいる所で厳しいことがたくさんある。大人が変わるまで、子どもを放っておくわけにはいきません。子どもを軸として地域をつくることを改めて考えていく必要があるでしょう。
- ・ 地域にどういう力があるか。地域の力をどうとらえるか。
田村市都路地区 … 大震災により、地域全体が避難をして、船引に仮設校舎。戻ってきた子どもを幟旗を立てて待っていた。歓迎した。→地域にすごい力がある。
子どもを支えるおばあちゃん応援隊をつくりたい。（子どもを育てる力がないのではなく地域には力がある。それを、どう引き出すかという視点を持つべきでないか）
- ・ 老人ホーム 認知症の老人 → ボランティアなどで子どもがホームに来ると喜んで、泣く。子どもから元気ももらう。そのくらい子どもには力がある。この力を借りて、子どもが育って、地域をつくる、老人が元気になる世界をつくる。
- ・ 私は今の子どもは不幸であると思っている。子どもはすごい力がありながらその力を発揮できる役割や出番がない。⇒ 子どもたちに役割と出番をつくってやる。（家庭・地域・学校で）
- ・ 「お手伝い」のある地域づくりをしたい。（この地域に来たら、みんな子どもたちがお手伝いをして、親や老人、地域を支える。）こういう地域をつくれないうかを改めて考えていきたい。

○境野氏（コーディネーター）

- ・ これでパネルディスカッションを終わります。どうもありがとうございました。



お知らせ

第3回「大人が変わるためのセミナー」講演会の開催

◇日時：平成28年10月22日(土)13:00~14:45 ◇場所：本宮市えぼか

◎演題：「子どもの生活習慣と家庭教育～楽しい子育て～」

詳細はチラシに記載

◎講師：元中学校長・大人への応援講座講師 小澤 悌一 氏